

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 15 日現在

機関番号：32632

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02214

研究課題名(和文) シリア・キリスト教研究 - アラムの視点からキリスト教を問い直す

研究課題名(英文) Study on Syriac Christianity

研究代表者

竹田 文彦 (Takeda, Fumihiko)

清泉女子大学・付置研究所・教授

研究者番号：60319811

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、今日まで、ほとんど我が国において本格的な研究がなされてこなかったシリア・キリスト教について、シリア語文献の解読を通して、その歴史的、思想的に解明することを課題としたものであった。研究者は、この課題について特に次の二つの点から研究を進めた。一つは、古代世界においては珍しい五つの異なる翻訳を生み出した「シリア語訳聖書の研究」、そして、もう一つが、イスラム勃興期におけるシリア・キリスト教徒たちの反応である。その成果は、学会、研究会、国際シンポジウム等での研究発表と論文という形で明らかにした。また、アフラハート、エフライムなどの著作のシリア語原文から翻訳を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意味としては、何よりもわが国においてこれまでほとんど本格的な研究が成されてこなかった分野において研究をおこなったことである。また本研究は、キリスト教の本質理解についても大きな見直しを迫るものともなり得ると思っている。社会的意義としては、今日、シリア・キリスト教徒の多くは、イスラム世界に少数者として生きており、ニュースなどで報じられているシリア難民の中にも多くのシリア・キリスト教会の信徒が含まれている。このことも意識的に研究発表や講演などにおいて言及するようにするよう努め、対立や紛争を越えて多文化共生社会を実現のための一助となるように努めた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to research history and thoughts of Syriac Christianity. This area of study is still lack of research in Japan. To fulfilled this lack I did my research especially in the following two points. First, various Syriac translations of the Bible. It is surprising that the Bible was translated five times in the ancient age. Second, how Christians in Syria accepted the rise of Islam. I studied several Syriac documents, and made clear Muhammad was influenced by Christian monk in his early ages. In addition to these studies I translated Syriac writings of Aphrahat the Persian Sage and Ephrem the Syrian. Also I wrote several articles related with Syriac Christianity in the Dictionary of Christianity which will soon be published.

研究分野：キリスト教神学

キーワード：シリア キリスト教 聖書 イスラム

### 1. 研究開始当初の背景

一般に、キリスト教というと西洋の宗教というイメージが強い。確かにわが国にキリスト教がもたらされたのは欧米の宣教師たちによってであり、彼らが伝えたキリスト教は、すでに深く西欧文化と結びついたものであった。しかしながら、このような「キリスト教 = 西洋の宗教」とするキリスト教理解は、極めて不適切なものであり、わが国のキリスト教理解がいかにか表面的なものであるかを物語っている。そもそもキリスト教は、中東のパレスチナに成立した宗教であり、キリスト教成立当初、信者の多くはユダヤ教からの改宗者たちであった。紀元 70 年にローマによってエルサレムが陥落すると、エルサレムの原始教団も消滅し、以後、キリスト教の主たる担い手は、パウロらの宣教によって回心した異邦人キリスト教徒たちとなり、結果として、キリスト教世界の中心も中東からギリシア・ローマ世界を経てヨーロッパへと移っていくことになったのである。しかしながら、たとえ歴史の流れの中でユダヤ・キリスト教の伝統が途絶えてしまったとしても、キリスト教はアラム語世界(より広く言えばセム語世界)のただ中で生まれた宗教であり、そのアラム的宗教としての性格は根本において失われてはいない。シリア語は、西セム語族に属するアラム語の一方言(チグリシ・ユーフラテス川流域のエデッサを中心とする地域で使われていたもの)であり、イエスや使徒たちが話したとされるパレスチナ・アラム語とは文字としてヘブライ文字の代わりにフェニキア文字を用いる点で異なるものの、発音されれば完全に相互理解が可能な言葉であった。このことは、シリア語を母語とするシリア・キリスト教が、エルサレム原始教団と同じ言語世界に属していたことを示している。実際、今日、シリア正教会、東シリア教会(アッシリア教会)等のシリア・キリスト教の伝統に属する諸教会で礼拝の際に唱えられている「主の祈り」は、その発音において約 2000 年前にイエス自身が唱えた祈りとほとんど変わりが無いと言われている。それゆえ、シリア・キリスト教の文化的、思想的解明は、キリスト教の本質理解にとって極めて重要な示唆を与えてくれるものである。にもかかわらず、残念ながら今日に至るまでシリア・キリスト教の研究者の数は、国際的にも限られており、ましてわが国においてはほとんどいない。私は、過去に学術振興会海外特別研究員として英国オックスフォード大学留学中(1992-1998)にシリア・キリスト教研究の重要性を学び、専門的研究者のもとで研究のために必要なシリア語の読解力と基礎知識を身に付けてきた。そしてこれまでに、学会などでシリア・キリスト教に関する研究発表を行うとともに、何編かの論文を公にしてきたが、本研究においては、これまでの成果を踏まえながらさらにシリア・キリスト教の思想的特質の解明に努めたいと思う。

### 2. 研究の目的

今日、シリアと言えば、内戦状態にある中で多くの難民を出し、イスラム国による文化遺産の破壊や、少数派住民の虐殺が行われている地域である。しかしながらこの地域は、イスラム勃興以前にはイエスや使徒たちが話したとされるアラム語の一方言、シリア語を用いる独自のキリスト教文化が栄えた場所であった。本研究の目的は、シリア語によって著作活動を行ったキリスト教作家たちの思想的特徴を文献学的に解明することにある。シリア・キリスト教文学は、その歴史的、思想史的重要性にもかかわらず、わが国ではほとんど知られていない。本研究によってこの学的空白を埋めたい。

### 3. 研究の方法

シリア・キリスト教は、五世紀を境として急速にギリシア文化の影響の影響を強く受けること

になったが、それ以前にはより純粋な意味でのアラム的キリスト教の特質が保たれていたと言われている。

そこで、四世紀以前のシリア・キリスト教の作家である「ペルシアの賢者」と呼ばれるアフラハット(Aphrahat, the Persian Sage)とニシビスのエフライム(Ephrem of Nisibis)の二人を取り上げ、彼らの著作を中心に考察を進める。特にエフライムについては、その著作の多くは、美しい韻律をもった詩文で書かれており、その中に様々な聖書的隠喩や象徴が織り込まれている。これは、「人は、神について直接語ることは出来ず、あくまでも比喩を用いて、しかも讃歌としてのみ語り得る」というエフライムのアラム的思惟の表れであるが、シリア語という言語の壁とその難解さのゆえに、いまだ邦訳されていない。そこでまず、それらの詩歌のいくつかを翻訳する作業から始め、丹念に注釈を付けていくことにより、その思想を浮き彫りにする。また完成した翻訳は、詳しい解説と註を付して出版もしたいと考えている。

シリア・キリスト教の思想的基盤となるシリア語訳聖書についての研究を進める。シリア語訳聖書は、何度も翻訳し直され、古代世界では珍しく五つの異なる翻訳が存在している。それらの翻訳の比較研究を通してそれぞれの翻訳の特質を明らかにする。

シリア・キリスト教研究のキリスト教の本質理解にとっての重要性についてはすでに上に述べた通りだが、本研究の意義は決して狭い意味でのキリスト教研究の領域に留まるものではない。古代世界においてシリア語が使われていた地域というのは、今日でいうところのトルコやイランといった国のある地域である。これらの地域は、後にイスラム教が勃興することになった地域でもあり、その意味でシリア・キリスト教は、イスラムにその思想的土台を提供したとすることが出来る。例えば、シリア語で「神」を表す「アラハー」は、イスラムの「神」<sub>、</sub>「アラー」と多少発音が違うものの、同じ言葉であり、両者の間には直接的ではないにしても文化的に密接な関係があることを示している。よってシリア・キリスト教の研究は、イスラム教の起源を探り、その思想を理解する上でも重要である。このような視点に立ち、イスラム勃興期におけるシリアキリスト教徒たちの残した文献を研究し、シリア・キリスト教徒たちはイスラムの勃興をどう受け止めたのかを、より広い視野から研究してみる。

これらの研究の成果は、学会等において発表するとともに大学紀要や学会誌などに随時発表したい。

#### 4. 研究成果

シリア・キリスト教の研究は、多岐にわたり、また、ほとんどこれまでにに行われてこなかったことからそのすべてを今回の研究期間で網羅的に取り扱うことは出来なかったが、それでも当初、立てた目的にしたがって一定の研究成果と次の段階での研究継続のための基礎を固めることは出来たと思う。具体的には以下の通りである。

##### シリア語著作のシリア語原文からの翻訳と解釈

ニシビスのエフライム(Ephrem of Nisibis) 『楽園讃歌』(Hymns of Paradise)

使用テキスト: E. Beck(ed.), Hymni de Paradiso. Corpus Scriptorum Christianorum

Orientalium vol. 174 = Scriptorum Syri, volume 78, Louvain, 1957.

本書の翻訳作業を通してギリシア文化の影響を受ける前のより純粋なアラム(シリア)キリスト教思想の特質が明らかになった。翻訳は、詳細な註を付けて出版に向けて準備中。

ペルシアの賢者アフラハットの『論証』(Demonstrations)

使用テキスト: J. Parisot (ed.), *Aphraatis Sapientis Persae, Demonstrationes*. Paris: 1894-1907.

本書の第7章をシリア語原文から訳出した。この部分は、シリア地域における原始修道制(proto-monasticism)について書かれており、論文として発表予定。

#### シリア語訳聖書

シリア語訳聖書は、シリア教会の公認訳であるペシッタ訳以外に、ディアテッサロン(『調和福音書』、クレトニアン写本、シナイ写本の二つの写本で伝わっている『古シリア語訳』、『フィロクセノス訳』、さらに聖書のギリシア語原文に忠実な『ハルケルのトマス訳』)の五つの翻訳が存在するが、より時代が下るにしたがってギリシア文化の影響を強く受け、ギリシア語聖書に語順においても、構文においてもより近い翻訳となっていることが実証された。この成果は、国際シンポジウム「モンゴル訳聖書とアジア・キリスト教の遺産」において「シリア語訳聖書 - その歴史と意味」というタイトルのもと研究発表を行った。成果は、「シリア語訳聖書 - その歴史と意味」 芝山豊他編『聖書から見るアジアの翻訳文化～周縁からの視点』 日本基督教団出版局掲載予定。(編集作業中)

#### イスラーム勃興期とシリアキリスト教

イスラーム勃興期のキリスト教文書についてイギリスの研究者ケネス・クラッグ (Kenneth Cragg) は、イスラーム世界に生きているオリエント・キリスト教徒たちは、キリスト教をイスラームと融和させることに失敗し、イスラームとの対決姿勢、反論と自己弁護に終始してしまったと述べて、あまり高く評価しようとはしなかった。このような見方は、その後のイスラーム勃興期のキリスト教文書についての研究においてほぼ受け継がれ、それらの文書は、真剣に取り上げるべき必要のないものとされてきた。確かにそれらは、イスラームとキリスト教との間でおこなわれた宗教間対話について語るよりも、キリスト教を弁証するためにイスラームの教えの過ちを浮き彫りにすることに集中していることは事実である。しかしながら、今回、改めてこの時代のシリア語文書、特に『キリスト教修道士ハビラの物語』を研究してみた結果、ムハンマドが若き日にキリスト教修道士から受けた影響などが語られており、その史実性は定かではないとしても、キリスト教とイスラームが必ずしも最初から対立的には捕らえられておらず、むしろキリスト教とイスラームの間における宗教観間対話において議論されるべき主要な問題は何かということを示している点こそが重要であることがわかった。それは、今日の世界の中でしばしば課題とされている宗教対立の解決の糸口として、イスラーム世界の中で、イスラーム世界のコンテクストにおいて、キリスト教の教えや倫理を再考するという価値ある努力の一例をそれらシリア・キリスト教徒の文書の中に見ることが出来るということでもある。この研究成果は、二度にわたって研究会、ならびに学術大会においては研究発表し、論文としてもすでに公のものとしている。

#### その他

当初の研究計画には含まれていなかったものの、科研費受給期間に行ったシリア・キリスト教に関する研究成果として、『キリスト教大事典』(教文館)(未刊)において約30項目以上のシリア・キリスト教関連項目を執筆し、これまでのあまりにも西欧の研究の受け売りであった部分を修正し、偏った見方を修正することが出来た。また、シリア・キリスト教に関する優れた研究書

S.P. ブロック『光る眼差し - シリアの聖エフライムにおける 霊的世界像』(仮題)の出版を目指して翻訳作業を進めることが出来た。さらに、色々な場でシリアキリスト教の重要性とその豊かな世界について講演等を通してお話しした。

加えて、社会貢献の分野になるかも知れないが、今日、シリア・キリスト教の伝統を引き継ぐ教会に属している人々は、いずれもそれぞれの社会の中で迫害を受けているか、少数者の立場に立たされている。数年前、日本でもニュースで話題になっていたシリア難民の中には、このシリア・キリスト教諸教会の信徒たちも多く含まれている。東シリア教会(アッシリア教会ともいう)は、トルコやイランに小さな共同体があるが、まさに「イスラム国」によって迫害され、処刑されたり、難民とならざるを得ない状況に追い込まれている人々である。またシリア正教会は、その多くの信者がレバノンやイラクに暮らしているが、圧倒的に文化的弱者の立場に置かれている。わが国ではわかりにくいこれらの現実、今日、グローバル化が進み、異なる文化的背景をもった人々が共存・共生していくことが求められている中で、宗教が、その一因となっていると言われる諸問題(宗教対立、戦争と平和、民族主義と宗教、宗教間対話など)について考え、その解決を模索するための重要な手がかりを提供してくれるものである。シリア・キリスト教研究がもたらしてくれる成果は、このように、近接学問領域にとっても多大な貢献をなし得るものであって、科研費研究を通してその成果の公表とともに常に強調することを心がけた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹田文彦	4. 巻 36
2. 論文標題 シリア・キリスト教徒たちの見たイスラーム勃興	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 上智大学キリスト教文化研究所『紀要』	6. 最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 竹田文彦
2. 発表標題 修道士バヒラの伝説 - イスラーム勃興とシリア・キリスト教徒
3. 学会等名 日本カトリック神学会 第29回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹田 文彦
2. 発表標題 シリア語訳聖書 - その歴史と意味
3. 学会等名 国際シンポジウム「モンゴル訳聖書とアジア・キリスト教の遺産」（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 上智大学キリスト教文化研究所編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 132
3. 書名 慈しみとまこと - いのちに向かう主の小道	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----